

高温対策（1月～5月）

【共通事項】

高温が続くことにより、農作物の生育ステージの急激な前進が想定される場合は、農作業計画の適切な見直しや農業資材等の確保に留意する。また、県病害虫防除所の病害虫発生予察情報の収集に努める。<http://www.jpnpn.ne.jp/kagawa/>

水 稲 4～5月

育苗中の「苗焼け」や「もみ枯細菌病」などの高温障害の発生を防ぐため、晴天高温時には、ビニールハウスを利用した育苗では換気を行い、シルバーポリトウ等によるトンネル育苗の場合には寒冷紗などを被覆し、ハウス内・トンネル内の温度が上がり過ぎないように注意する。

麦 類 1～2月

平年よりも生育が早期化している地域が多く、今後も気温が高い傾向で推移することが予想されることから、麦の生育状況を的確に把握し、生育ステージや生育量に応じて追肥を行う等の対策を実施する。

麦 類 3～4月

平年よりも生育が早期化している地域が多く、今後も気温が高い傾向で推移することが予想されることから、麦の生育状況を的確に把握し、赤かび病等の適期防除に努める。

茶

- 1 今後、高温傾向で推移すると萌芽が早進し、春先の低温による新芽の凍霜害の発生が懸念されるため、霜注意報等の気象情報に留意するとともに、新芽の生育状況を十分に把握し、生育状況に応じた適切な防霜ファンの稼働など必要な対応をとる。
また、防霜ファン等の防霜施設の状態は事前に十分点検し、必要があればメンテナンスを行うよう努める。
- 2 冬の低温と今後の高温により、新芽（一番茶）の生育不揃い、新芽数の減少等による収量減や品質低下が懸念されるため、秋整枝を行わなかった茶園にあっては、樹勢状態を観察しながら、適切に春整枝を実施する。
- 3 害虫類の越冬数が多くなり発生の早期化も懸念されるため、茶園の観察により害虫の早期発見に努め、適切な防除を実施する。

野 菜

- 1 高温が続くことにより、軟弱徒長の生育が懸念されることから、追肥量の節減等適正な肥培管理を図る。
- 2 病害虫の発生予察やほ場の観察による発生動向の把握に努める。ヨトウムシ類、アブラムシ類、コナジラミ類、アザミウマ類、ハダニ類等の害虫は発生の早期化による大きな被害の発生が懸念されるので、早期発見、適期防除に努める。加えて、罹病した株の除去等ほ場の衛生管理に努める。
- 3 急激な冷え込みや凍霜害の懸念が予想される場合は、必要に応じ、トンネル、寒冷紗、不織布の被覆等により凍霜害の被害回避を図る。

果樹・オリーブ

- 1 開花が早まる場合は、降霜や一時的な低温により凍霜害の発生が懸念されることから、防霜用資材の準備や防霜ファンの点検を早めに行う。
- 2 生育の前進による受粉樹との開花期の不適合、訪花昆虫の活動低下により結実不良が懸念されるため、人工授粉用の花粉の準備等を早めに行う。また、低温遭遇時間に留意して加温時期の適正化に努める。
- 3 病害虫の発生が早まること懸念されるため、果樹園での発生状況や病害虫発生予察情報等に留意し、適時適切な防除に努める。また、罹病部位の除去等ほ場の衛生管理に努める。

花き

- 1 露地花きでは、高温により発芽や生育が早まることにより、春期の晩霜害が発生しやすくなることから耐寒性の弱い品目についてはトンネル、寒冷紗、不織布等による被覆を実施する。
- 2 病害虫の発生予察やほ場の観察による発生動向の把握に努める。特に過湿状態の施設では、病害（うどんこ病、灰色かび病等）の発生が増加するため、施設の換気と早期防除に努める。さらに、アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類等の害虫の発生が早まるため、早期発見、早期防除を徹底する。
- 3 気温の上昇に伴い、ハウス内が高温になると、作物の生育が早まり、軟弱徒長となりやすいため、必要に応じてハウス内換気をするなど、温度管理を徹底するほか、追肥量の節減等適正な肥培管理を図る。

畜産・飼料作物

- 1 飼料作物については、高温が続くとスプリングフラッシュ等による急激な草勢が見られるため、生育状況を踏まえて適切な作業に努める。特に、例年より作業時期が早まる可能性があることを考慮し、準備を進める。
- 2 土壌条件等により高温及び晴天の影響を受けやすいほ場では、土壌の保水力を向上させるため土壌改良資材の投入等を行うとともに、今後、播種を行う場合には、耐干性に優れた草種・品種の選定に努める。